

書評：『鳥取春陽 日本モダニズムのなかの演歌師』

著 者：杉座秀親
出版社：くんぷる
出版年：2016年2月5日
総ページ数：348頁

評者：菊池哲彦
(表現文化学科 准教授)

大正期から昭和初期にかけて活躍したひとりの演歌師の名を書名に掲げる本書は、彼の人物評価を加えながら構成された伝記であるという点で、流行歌「籠の鳥」の作曲者として知られるその演歌師「鳥取春陽」の「評伝」である。これまでの鳥取春陽研究が依拠してきた、春陽の配偶者・山田貞子による手記『鳥取春陽のすべて』の記述を、別の資料（『演歌』『民衆娯楽』『茶太楼新聞』といった刊行物や書簡など）と照合することによって、本書はより精度の高い鳥取春陽の評伝として成立している。

しかし、評者が注目したいのは、本書が優れた「評伝」であると同時に、「生活史」に依拠した「社会学的研究」でもあるということだ。社会学における「生活史」にはふたつの立場がある。ある人物の人生（life）の物語（story）としての側面を重視する「ライフ・ストーリー」としての生活史と、ある人物の人生と歴史（history）との関連を重視する「ライフ・ヒストリー」としての生活史である。本書は、「鳥取春陽」という個人の人生から、彼の生きた日本社会の歴史を浮かび上がらせている。その意味で、本書は「ライフ・ヒストリー」としての生活史の方法によって立つ社会学的著作である。

本書と同じ日本近代における流行歌を扱った社会学的研究に、見田宗介の『近代日本の心情の歴史：流行歌の社会心理史』（1967年）がある。見田の著作は、流行歌に用いられたモチーフ（「怒り」「うらみ」「よろこび」「孤独」「郷愁」など）の変化と日本社会の変化とを関連付け、そこから日本人の心情の変化を読み解いていくものであり、焦点は日本社会における日本人の心情のありようにある。それに対し、本書は、ある個人の人生から、その人物が生きた社会を描き出そうとする。本書の関心はむしろ、社会的な心情というよりも、個人の人生と社会との関係のありようにある。「日本モダニズムのなかの演歌師」（傍点強調は引用者）という副題はそうしたライフ・ヒストリーとしての本書のねらいを明確に示しているだろう。

このように、本書は、日本近代の流行歌という同じ対象を扱いながら、見田の著作とは異なる視角を持った「社会学的」研究になっている。ここでは、その「ライフ・ヒストリー」としての側面に注目して、本書の持つ社会学的可能性を評してみたい。

ライフ・ヒストリーとしての本書において中心的役割を果たすのは、いうまでもなく演歌師「鳥取春陽」の人生である。1900（明治33）年に岩手県下閉伊郡刈屋村（現在の宮古市）で生まれた鳥取春陽（本名・貫一）は、14歳になった1914（大正3）年、立身出世を夢みて家出同然に上京する。しかし、東京では安定した職業に就くことができず、木賃宿を転々とする生活を送る。そんな生活のなかで、演歌師の添田啞蟬坊・さつき親子と出会い、1918（大正7）年に「みどり節」を作曲（作詞は添田さつき）し作曲家兼歌手の演歌師として活動するようになる。そして、1922（大正11）年に作曲した「籠の鳥」が全国的に大流行し有名演歌師となる。

1923（大正12）年の関東大震災の影響で活動の場を大阪に移し、レコードやラジオの普及を追い風に、新民謡やジャズなどの新しい要素を自曲に取り入れるなど音楽活動をさらに活発化する。しかし、活躍の最中、結核を病み1931（昭和7）年に32歳で逝去する。

こうした春陽の人生は、本書のなかで詳しく触れられているように、政治活動で投獄されたり、家族や地元の人々の冷たい態度に傷ついたり、宿痾に悩みながらも同棲を開始し娘を授かるなど、悲喜交々のエピソードに溢れている。このような伝記的な事実を読むだけでもじゅうぶんに興味深いのだが、本書はライフ・ヒストリーに依拠する社会学的研究でもある。彼個人の人生と彼が生きた社会との関係がどのように示されるのか。

春陽は波瀾万丈の人生を生きたが、彼の人生は明治末から昭和初期の日本社会における人生であった。だからこそ、本書では、彼の人生は彼が生きた時代の日本社会の状況に関連付けられる。たとえば次に引く箇所のように。

春陽が刈屋の兵役検査から帰京した年〔1921年〕の九月、安田財閥の開祖安田善次郎が大磯の別邸で暗殺された。一ヶ月後には、政友会を率いて平民宰相といわれた同郷の原敬が東京駅で刺殺される。暗転した生活苦から、自殺者が七百名近くにのぼった。一方で柳原白蓮が夫と別れて自由恋愛に生きる、いわゆる白蓮事件が新聞をにぎわせた。〔／〕このような世相を反映してか、野口雨情作詞、中山晋平作曲の「船頭小唄」が大いに流行した。〔中略〕春陽はヒコキ印レコードとオリエントレコードで、この唄の吹き込みをしている。〔中略〕これ〔「船頭小唄」〕以降、「演歌は明治の政治性とも諧謔性とも縁を切り、感傷的な歌謡を指すようになる」。そして、「船頭小唄」は、戦後の不況にともなうあきらめの気分が広がる一九二〇年代後半から一九三〇年代半ばの風俗を支えていく役割を果たす。（本書182-183頁〔 〕は引用者による）

ここでは「船頭小唄」の録音という春陽の人生におけるひとつのエピソードが、第一次世界大戦後の世相や流行歌の新しい傾向と関連付けられている。「第一次世界大戦後の世相」や「政治性を帯びていた明治期の演歌」については、この前後でも詳細に説明されていることは念のため付け加えておきたい。

春陽が生きた明治末から昭和初めまでの日本社会は、立身出世主義の浸透や交通網の整備による都市への人口集中、度重なる戦争による景気変動とそれに左右される民衆の生活、社会主義運動の展開と弾圧、都市化にともなう産業構造や労働の変化、モダニズム文化と民衆娯楽の隆盛、関東大震災など、急激な近代化によるさまざまな影響が混沌となって現れた激動の時代である。こうした社会的状況が、家出同然の上京、漂泊生活、都市の「労働者」との関係、演歌の世界への参入、米騒動への参加や投獄経験、活動写真や浅草オペラに代表される新しい都市文化への関与といった春陽の個人的経験と関連付けられながら本書全体の記述は進行していく。

本書は、このように、春陽の人生と、彼が生きていた日本社会の状況とを関連付けることで、春陽が見ていた世界、彼が生きた日本社会を描き出している。鳥取春陽の人生を通して彼が生きた歴史的な社会を浮かび上がらせている点で、本書は優れたライフ・ヒストリーの社会学である。

ライフ・ヒストリーとしての本書にとって、「鳥取春陽」という人物は、彼が生きた日本社会の風景を描き出す、いわば「カメラ」である。カメラはレンズの前に広がる世界をそのまま

映し出す。それゆえ、本書では、春陽が演歌師として関わってきた民衆娯楽の世界、演歌の世界が特に生き活きと描き出されている。

春陽は、政治的演説歌としての明治期の演歌（いわゆる壮志演歌）に出会うことで演歌の世界に足を踏み入れた。春陽が影響を受けた添田啞蟬坊・さつき親子が主導した演歌は民衆の政治的な不満のはげ口という明治期演歌の側面を残していたが、第一次世界大戦後の経済的・政治的状況のなかで、春陽も唄った「船頭小唄」のように心情を唄って民衆を慰撫するような演歌に変化していく。そこからさらに、消費文化の隆盛やメディアの発展にもなって演歌は享乐的な流行歌へと変化し、春陽は新民謡やジャズのような新しい要素を積極的に取り入れて音楽活動を展開する。春陽は、近代日本の演歌の世界において、その変化のただなかを生きた人物である。だからこそ、本書は、彼というカメラを通して、民衆娯楽としての流行歌の世界とその変化が生き活きと描かれているのである。

しかし、本書で描き出されている「春陽が生きた日本社会」は「ある時代における日本社会そのもの」ではない。カメラはレンズの画角の外側に存在する世界は捉えられない。本書が描き出しているのは、カメラとしての鳥取春陽が直接見聞きしたであろう「民衆娯楽としての演歌」を中心とした世界、あくまでも、「ある時代の日本社会の一様相」である。

しかし、急いで付け加えておきたいのは、「一様相」しか描き得ていないからといって本書の社会学的意義が低いわけではない、ということだ。そもそも、多様な人びとが多様な世界を生きている「社会そのもの」を描くことなど不可能である。だからこそ、ある個人の人生を通してその人物の生きた社会の一様相を提示するライフ・ヒストリーには社会学的な意義がある。つまり、「ある時代におけるある個人にとっての日本社会の一様相」を深く理解することが「私たちが生きる現在の日本社会」について考える重要な端緒になりうるのである。

私たちと異なる時代・社会を生きた鳥取春陽は、私たちにとって「他者」である。「私たち」が「私たち」自身をより理解しようとするれば、「私たち」の内部で考えるのではなく、「他者」を経由して考えなければならない。「他者」としての鳥取春陽の人生と、彼が生きた社会の一様相を理解することは、「私たち」が生きている社会のある部分をより深く理解することにつながる。たとえば、春陽が生きた民衆娯楽としての演歌の世界における変化を、社会派フォークから叙情派フォーク（四畳半フォーク）を経てニュー・ミュージックに至る1960年代末から1980年代にかけての日本のポピュラー音楽の変化や、ロックの政治性をめぐる変化（政治的カウンター・カルチャーとしてのロックから商業ロックにおける政治性の忌避へ）と比較して考える事によって、現代のポピュラー音楽の世界をより深く理解することができるだろう。

大正期から昭和初期に活躍した演歌師のライフ・ヒストリーは、彼の生きた社会そのものを私たちに提示できない。しかし、その演歌師という他者を通して私たちが生きる現代を理解する道を開いてくれる点に、ライフ・ヒストリーとしての本書の可能性がある。